

# こらっせ便り



2014年5月19日

【編集・発行】「福島子ども・こらっせ神奈川」 TEL : 045-353-9008

FAX : 045-353-9998

Eメール : info@korasse-kanagawa.org

## 2014年度横浜・山北リフレッシュプログラム

「福島子ども・こらっせ神奈川」事務局長 遠野 はるひ

昨年より遅れてしまいましたが、今年のリフレッシュプログラムの日程がやっと決まりました。8月6日（水）から8月10日（日）まで、前半の2泊は山北町の丹沢荘で、後半の2泊は横浜市の野島青少年研修センターでおこないます。決定が遅れた理由は、私たちが設立当初から目指している「移動教室」の実現に向け、情報を集めたり交渉したりしていたからです。

「こらっせ」は「移動教室」のモデルになるようなプログラムができないかと試行錯誤を繰り返しながら、微力ではありますが、国や地方自治体に対しても働きかけをしてきました。2013年5月には、「こらっせ」の活動を知った那谷屋正義議員（民主党）が、参院文教科学委員会において下村文科大臣に「移動教室」の実現に向けての質問をおこない、大臣からは前向きな回答がありました。6月には神奈川県下の他の保養グループと一緒に文科省へ行き、県外へ「移動教室」を広げること、制度化・予算化すること、民間団体との協力関係の構築等をお願いしてきました。文科省は私たちの要請を受け止めたためか、2014年度は予算が措置され、「移動教室」の実施場所も福島県外に広がりました。大きな進展です。「こらっせ」のプログラムも、制度をつくる過程で「モデル」の一つとして参考にさせていただいたということで、「こらっせ」の事業でもこの制度を使うことができないかと考え、4月初めにこの制度の全貌があきらかになるまで動き出すのを待っていました。

この制度—「ふくしまっ子自然体験・交流活動支援事業」を、福島県外の私たちのような民間団体が利用するためには様々な条件があります。とりわけ高いハードルは、①県外での実施は6泊7日以上、②福島県内の社会教育団体が申請の当事者であるという2点です。夏休み中も部活などで忙しい中学生や小学生高学年を対象にしている「こらっせ」のプログラムで、6泊というのは長すぎます。また、町民がバラバラになってしまっている檜葉町では、社会教育団体の実態がないということもわかり、今年はこの制度を使うのをあきらめるしかないと判断しました。

しかしながら、「移動教室」は確実に広がっています。神奈川県では川崎市が予算措置をおこない、伊達市の「移動教室」を受け入れることになりました。今後、福島県内外で、自治体と自治体、自治体と民間、民間と民間のような多様な形の「移動教室」や「交流事業」が一步一步、実を結んでいくのではないのでしょうか。「こらっせ」の賛同者・団体のみなさまのように、福島の、日本の子どもたちの未来を思う心が、国や福島県を動かしたのだと思います。私たちも、福島っ子全員が参加できる「移動教室」の実現に向け活動していきたいと思っています。引き続きのご賛同をよろしく願いいたします。

# 9か月ぶりに榊葉っ子にあって感激！

事務局 蜂谷 隆



＜サポートセンター「空の家」＞

連休2日目の4月27日、昨年の「横浜・山北リフレッシュプログラム」に参加した榊葉の子ども達と福島県いわき市の仮設住宅にあるサポートセンター「空の家」で交流会を行いました。参加したのは子どもは高校生になったOB1人を加え12人。横浜からはスタッフ7人、学生スタッフ9人が車3台で駆けつけました。

当日、横浜からの先発隊は早朝5時半に出発、9時半に現地に到着。残り2台も11時過ぎに無事到着、準備を開始しました。子ども達も予定通り12時には別の仮設住宅からの5人もそろい、昨年8月

以来9か月ぶりの再会を喜び合いました。子どもと再会してびっくりしたことは、背が高くなったことです。中には10センチ近く伸びた子もいました。

まずはカレーライスづくりからです。「空の家」の厨房でおしゃべりをしながら、にんじん、ジャガイモ剥きから始まって、手際よく料理が進行。カレーのにおいが館内に充満すると食欲が湧いてきたのか、ますますピッチが早まり、午後1時過ぎには「いただきまーす」。

飛ぶように売れたカレーライスとサラダ。なぜか作ったカレーの割にご飯が少なく、急きょご飯を追加して炊くことに。そのご飯もすべてお腹に納まりました。食後は、大人中心にお片付け。学生スタッフと子ども達は思い思いに遊びに興じたのですが、残念なことに午後2時半になるとバトミントン部に所属する男子は、練習参加に向かいました。

残った女子を中心に輪ができ、ビニールのボールを打ち合いました。ボールが上に上がるたびに大きな歓声が響き渡り、否が応でも盛り上がります。子どもは遊びの天才。たったボール1個で皆が楽しめるのです。



＜「空の家」の厨房での食事作り＞

今回は、大学生の齊藤君のご両親も参加、避難生活や教育の現状などについて、お話を伺うこともできました（主として山際代表が対応）。このほか3人のお母さんの参加もありました。また、高校生になった佐藤君の案内で双葉高校を見学しました。あっという間に4時間が過ぎて、交流会は午後4時にて終了。全員で記念写真（残念ながらバトミントンの練習で中座した男子は入っていません）。最後はなごり惜しい

子ども達と学生スタッフは、「また丹沢荘で会おうね！」と誓い合い、ハグを続けていました。午後5時半、スタッフ、学生スタッフは、再び車3台に分乗、子ども達の笑顔を思い浮かべつつ、反省点を出し合いながら横浜に向かいました。9時半には横浜駅西口に無事到着しました。

# こらっせ交流会に参加して

事務局 工藤 妙子



＜ 檜葉町の仮設小・中学校 ＞

4月27日早朝、横浜を出発し、一路いわき市にある「空の家」へと金子さんの運転で高速道路を快調に進んで行きました。前日買い込んだカレーライス等材料等の重さでスピードがでないとのことでした。

それでも予定より早く到着したので、仮設の檜葉町の小・中学校の校舎を外側から眺めることができました。教室等には入れませんでした。雰囲気は掴めました。寄贈図書があるとのことでしたが、次回訪問できたら、図書の内容を確認したいと思います。校庭で運動ができるのが確認でき、安心しました。

「空の家」に着き、昼食のための下準備を始めました。佐藤聡さんと弟さんが早めに来て野菜洗い等を手伝ってくれました。蜂谷さんの車も到着し、金子さんと蜂谷さんの車で女子生徒（5名）を迎えに行きました。12時にはオイドンさんの車が着き、男子生徒もお母さんに送られて参加し、学生さんたちとの再会を喜びました。

学生の横山さんをチーフに女子生徒が楽しみながらカレー、フルーツポンチを料理しました。男子生徒は室内で学生さんとの交流を和気藹々に繰り広げました。料理はとても美味しく大成功でした。食後には学生さんたちが用意したゲーム等で交流は盛り上がったようです。短時間での交流は名残惜しむ形で終わりましたが、夏の再会が楽しみになりました。

積み重ねの交流はとても大切なことですね。私は昨年、参加していませんが、事務局や学生さんたちの思いが伝わった交流会でした。事務局長の遠野さんはPTAのお母さんと話げできたので、それも一つの成果だと思います。

私は石巻等、津波に襲われ瓦礫となった地域を何度か訪ねたことはありますが、福島県いわき市には震災後初めて訪れました。自然が美しく、のどかな所です。「空の家」近くの檜葉の仮設住宅では庭で花や木を育てている家も見かけました。静かで穏やかな時間が流れています。



＜ 子供たちの旺盛な食欲 ＞

除染等が進み、檜葉町は「避難指示解除準備地域」に指定され、帰還への動きがでています。「帰町計画」が策定され、「安全の確保」「生活に必要な機能の回復」を大前提に帰町への道筋が進められています。そして、今年の3月には「町内に計画する公営住宅説明会」が開かれました。ただ、福島第一原子力発電所、福島第二原子力発電所の問題が根本から解決されない限り帰町に二の足を踏む家族もいらっしゃることでしょう。一方住み慣れた土地に戻りたい方々も大勢いらっしゃるでしょう。今回、い

わき市を訪ねて、若い人たちの交流が微笑ましく、微力ですが、今後もバックアップ的活動を続けたいと思うようになりました。

# やっぱり一緒にいると楽しい



＜ボール遊びを楽しむ＞

県立保健福祉大学4年 横山 満里奈

私は、「福島・子どもこらっせ神奈川」の活動に関わるのは今年で3年目になります。きっかけは大学の先輩からの紹介でした。私は、東日本大震災が起きたあと何か協力をしたいと思い、募金や岩手県へ震災ボランティアなど、積極的に参加していました。しかし、途中から自分の気持ちに負担を感じてしまい、何か別の形で関わることができないかと考えていました。そんなところに、こらっせのボランティアに参加するお話をいただきました。

1年目は、普段触れ合うこともない小中学生の子ども達の元気についていくのがやっとなりました。しかし、子どもと触れあうことがとっても楽しかったこと。そこに参加する学生や子ども達、事務局の方々達がとてもイキイキと映ったことが心に残り、ぜひ次回も参加したい。次は企画から関わりたいと思っていたら、あっという間に3年目を迎えてしまいました。

今思うと企画から参加した去年は、自分でも何かしようと思いつつも、いつも傍で見て学生たちのパイプ役になってしまっていたというのが実際のところでした。終わってみると、なんとなく子どもと関わるよりも、全体を動かす方に手がいっぱいになってしまった様な気がしています。本当に子どもにとって楽しかったのか。これでよかったのか。自分自身に色々疑問が残るプログラムとなりました。

今年は、まだ手探りでやってきた昨年までとは違い、大学生がそれぞれ課題を持って調べたことを発表する「学習会」、現地でのカレー作りやレクリエーションを通した「交流会」といった企画が既に動いています。そして、6月にはゲストをお呼びしてのキックオフミーティングが控えています。

先日の交流会では、久々に会った子ども達でしたが身長や顔つき等の外見が一回り大きくなっていくことに驚かされました。(中身はあんまり変わってないかな・・・?)一緒にカレーやフルーツポンチを作ったその味は、特別に美味しかった様に感じました。やはり一緒にいるととても楽しいと感じました。

しかし彼らは、私達が想像できないような環境の中で何かしらのストレスを感じていると思います。遊び場であったり、学校のことだったり、家のことだったり。震災から3年が経ちましたが、被災地から少し離れると震災の直接の影響が無くなっていると感じます。彼らが直接言わなくても、なんとなく様子は厳しいものがあると感じます。その影響は私達に見えない部分で進行しているのかもしれない。

大学生の身で出来ることは限られていますが、まずは今回のプログラムが成功する様に学生ならではのパワーとアイデアで参加したいと考えております。学生として関わる最後のプログラムに少し寂しさを感じてはいますが、私自身は長い目で見てどこかで関わっていけたらと思っています。

檜葉の子ども達にとって、横浜と山北で大学生と遊んだ。楽しかった。また行きたい。また来年こらっせで。と言える様な継続的な支援が提供出来る様なになれば理想だと思います。支援を続けるには、様々な方からのご協力が必要だととても感じております。私自身、不慣れなことが多くてバタバタしながらこの3年目を迎えたが、こらっせを通して自分自身の更なる成長に繋げていきたいと思っています。

# 素直に笑顔になれる場ができた

青山学院大学2年 駒木根 怜



＜美味しい食事が完成＞

先日、福島子ども・こらっせ神奈川（以下こらっせ）主催の、福島の子どもの交流会がありました。その子どもたちは、初めて会った子たちではなく、去年8月の「活動」で知り合った子どもたちで、あれから8か月以上の時間がたっているのに、変わらない笑顔が、懐かしい笑い声がありました。到着してすぐ、ある子から「あ、駒木根さんだ。」と笑いかけてくれたことや、一日中レクリエーションをしてもなお、「まだ遊ぼう」と言ってくれたことはとてもうれしかったです。

そもそもこらっせは、夏に「リフレッシュプログラム」と呼ばれる、普段外でなかなか自由に遊べない福島の子どもたちを神奈川に招いて、私たち大学生と思う存分に外で遊んでもらいつつ、勉強もするというイベントを毎年開催している団体で、私は昨年からお世話になっています。先輩づてでこのイベントを知り、教員志望の私にとって「子どもたちと交流ができる」「学習支援ができる」そして何より「大震災の被災地のためになる」ということは、すごく魅力的に映り、参加しました。しかし実際に参加してみると、私たちが普段、被災地に対して見当違いをしていることに気づかされます。というのも子どもたちと触れ合う中で、「今もつらい」「まだ厳しい」といった心の病を抱えているのを知ったからです。目に見えない、メディアからは知ることのできない事実を肌で感じたからです。また、そもそも福島のことを知らないということも併せて気づかされました。そのために以前、福島についての学習会が行われました。私たち大学生が予めテーマを決めて、各自が持ちテーマについて調べてきたことを発表する、というものでしたが、他の学生の発表を聞いている中で、知らなかった事実や、被災地の現状を知ることとなりました。

大学生として、一人の大人として、知るべきことを知った学習会。そして子どもたちにとっては、素直に笑顔になれる場を提供できた交流会。お互いにとって、よい場所となれたこと、そして、その場が今年の夏も「リフレッシュプログラム」として与えられること。とても感謝しています。そして今年の夏は、福島の子どもたちに、再び「会いに行く」。それも福島のことを知ったうえで会いに行くこと。すごく楽しみになった、学習会と交流会でした。

## 頼れるお兄さんのような存在に！

青山学院大学2年 石渡 博之

私は福島県には所属している学生団体の活動で幾度か訪れたことがありましたが、いわき市を訪れるのは初めてでした。昨年の夏に横浜で触れ合った彼らと福島で生活している彼らに“違い”はあるのかといった疑問や、半年以上経って成長した彼らの姿が見られるといった期待を持って今回の交流会に参加しました。

最初に空の家に着き感じたことは、仮設住宅と一般の住宅が隣り合わせに建っている風景への驚きでした。神奈川ではみられる風景ではなく、仮設に暮らしている人々と一般住宅に暮らしている人々の間にいわゆる“壁”が存在していたら、この後も続いていくのであろう仮設住宅での生活に影



＜双葉高校＝いわき明星大学内サテライト校舎＞

響を及ぼしてしまうのではないか。このことは憶測ですが震災が引き起こす問題ではないかと思いました。

私は前回の活動で小学 5,6 年生を担当していて、今回は中学 1 年になった男の子が 1 名参加してくれました。身長も伸び、やんちゃな性格がなくなって大人びた彼の成長を嬉しく思いました。カレー作りにはあまり参加せず、彼の仮設住宅まで散歩に出かけました。中学 1 年になり、進路や就職など将来

のことに対する悩みを相談されました。今年の彼とは別人のように感じ、改めて大学生の自分のできること、つまり彼らの頼れるお兄さんのような存在であり続けたいと思いました。

## 子ども達の「わくわく」感が伝わってきた

県立保健福祉大学 3 年 大内 万里

福島子ども・こらっせ神奈川の活動で、現地での交流会に参加し、楡葉の子ども達と素敵な時間を過ごすことができました。交流会に参加するにあたっては、学習会も行われ、福島のことについて知る機会を得ることが出来よかったです。

学習会では、原発、仮設住宅、復興計画など、それぞれが調べてきたことについて発表しましたが、生活の中にメディアの様々な情報があっても、知ろうとする意識が伴わなければ、考える力は生まれのではないかと感じました。どのようにすれば、生活の中で、多くの人に知ることから考えることへつなげる機会を作れるだろうか、学習会での学びと同時に今後の課題を感じました。

交流会では、子ども達とカレーを作り一緒に食べたり、レクをしました。神奈川ではなく、地元にいる子ども達を見て、わくわくしている気持ちが伝わり、このプログラムが夏休みの大きな思い出になっていることを強く感じました。また、高校についての説明や、明星大学にある、楡葉小中学校や、双葉高校に見学にも行かせていただきました。プログラムに参加する子ども達が、どのような場所や環境で過ごしているのかを想像や人から聞くのではなく実際に見ることが出来ました。とても広いキャンパスの中で、高校生の場合は教室を借りたり、授業とは別の建物に移動しながら学校生活を送っているというお話を、現地にいた高校生から何うことも出来ました。参加者の中には、部活動をして

いる子が多いとのことだったので、今度会った時には、授業や部活の話も一緒にしたいなど、ひとつ夏に向けて楽しみが出来ました。

去年は参加者だった高校生ボランティアとどのようにプログラムを盛り上げていけるのか今からとても楽しみです。今度神奈川に来た時には、もっとわくわくできて、楽しめる機会にできるように、これからも活動に参加させていただきたいと思います。今回は貴重な機会をいただきありがとうございました。



＜「空の家」前での記念写真＞